

人権保育専門講座8(連続講座②)

ともに考え合うことを通して深めよう

～各園における人権保育を推進するために～

テーマ「**在日外国人問題について**」

～園内の人権保育推進の現状と課題を出し合おう～

常磐会短期大学 教授 **ト田 真一郎** さん

家庭支援推進保育士の方を中心とした「連続講座」の2回目です。

【今年度の連続講座のすすめ方】

各回のテーマについて、3ステップで研修をすすめる。

研修の3ステップ

- ①各現場で抱えている課題を『共有』する
- ②お互いの取組について『交流』する
- ③だれに対して、何を、どのように『発信』するのかを考える



連続講座②のテーマは、「在日外国人問題について」でした。

現在、日本社会では「多文化化」がすすみ、在日外国人のおかれている状況も多様化しています。それにあわせて、保育現場における在日外国人の子どもや保護者を取り巻く状況も多様化しています。そこで、外国につながるのある子どもや保護者を取り巻く状況を共有し、どのような課題があるのか考え合いました。そして、どのような実践を行うのかを話し合うことにしました。

連続講座ではゲストスピーカーの方にお越しいただき、テーマにあわせた体験や実践をお話いただくことにしています。今回は大阪聖和保育園の^{きん} ^{へしん}金 恵心さんをお招きしました。

1. 大阪聖和保育園 ^{きん} ^{へしん}金 恵心 さんのおはなし

みなさんの周りに在日韓国・朝鮮人はいますか？実際は身近にいるのに、その存在に気づいていないということはありますか？

今日は、自分の体験をとおして考えていることや、私たちの園で取り組んでいることなどをお話します。



○在日韓国・朝鮮人の状況について

在日韓国・朝鮮人の知り合いが身近にいない、という人も多いかと思います。しかし、実際には身近にいるのに、気づかないという場合があります。在日韓国・朝鮮人で本名でなく通称名を使って暮らしている場合、その人が在日韓国・朝鮮人であることを周囲が知らない、ということがあるからです。

調査によると、1980年には外国人登録者数約78万人のうち、韓国・朝鮮籍の人は、約66万人という状況でした。1990年に入国管理法の改正により、中国をはじめ様々な国からの渡日者が増えた結果、2000年には外国人登録者数は約1,600万人となり、2013年には2,000万人を超えているのですが、そのなかで在日韓国・朝鮮人は約60万人、近年は50万人を推移しています。ちなみに、私の住む大阪の生野区は、およそ20%が外国人住民なのですが、そのうち約90%が韓国・朝鮮籍です。5人に1人が在日韓国・朝鮮人であるというわけです。

日本において在日韓国・朝鮮人が多い理由は、歴史経緯にあります。ご存じかと思いますが、韓国併合の結果、日本の労働力を補うために海を渡らされ、創氏改名や言語統制もあって、「日本人」として暮らすことを強制されました。終戦後、さまざまな事情があって日本に住み続けざるを得なかった人たちが在日韓国・朝鮮人のルーツとなっている場合もありますが、戦後すぐに成立した法によって、今度は「外国人」の扱いとなりました。社会情勢に伴って、「日本人」にされたり「外国人」とされたりしたわけです。

日本に暮らすことになった在日韓国・朝鮮人は、通称名の使用が認められました。通称名があることによって、自分が在日韓国・朝鮮人であることを周囲に隠そうとする人も現れました。もちろん、社会に差別があり、それを逃れるための選択でした。その他にも、指紋押捺の精神的な苦痛や、職業選択の狭さなどに起因する経済的な厳しさのなかを生きていくことになります。

○私のことについて

私は、在日韓国・朝鮮人です。母は在日2世ですが、父は戦後日本に渡ってきた1世です。父は、韓国の訛りがあって日本語の発音がうまくなかったので、父が人と話しているのを聞くのが恥ずかしくて嫌でした。

私の友人には、在日韓国・朝鮮人であることを隠そうとする家庭に育つ人がいました。ある友人は、10歳になるまで自分は日本人だと思っていて、在日韓国・朝鮮人を差別していたそうです。子どもたちのなかにも、差別が当たり前のようであったのです。私も、「自分もいつか差別に遭うのでは」と思って子ども時代をすごしていました。

私は、小・中・高・短大と通称名を使用していたのですが、仲のいい友だちにはいつか言おうと思っていました。そして、いよいよ自分のことを打ち明けたのですが、友人は、「そうなんや。でも、大丈夫。ぜんぜんそうはみえへんよ」と言いました。私は、励まそうとしている気持ちを感じながらも、「そうはみえないから大丈夫」という言葉には、こ



れまでの悩みや自分が受けてきた差別が無いものにされてしまったような感じがして違和感を覚えました。「これからも隠し続けていきなさい」と言われたように感じたのです。まだまだ社会的には理解されていないのだな、と感じました。

地元にある在日韓国・朝鮮人が多く集う町の教会では、私は「ありのままの自分」でいられました。そして、「在日韓国・朝鮮人であることを否定することはないんだ」と自覚するようになりました。そして、在日韓国・朝鮮人のことをもっと日本人に知ってほしい、と強く思うようになりました。私は通称名を棄てることを決意しました。

本名を名乗ることを、父母は心配し、反対しました。しかし私は区役所に行き手続きをしました。「これで通称名とお別れできる。本当の自分を獲得するのだ」という気持ちになりました。自分が何者であるのか、どのように生きていくのかを自覚するという、まさにアイデンティティの確立を実感した瞬間でした。

在日韓国・朝鮮人は、母語を失い、ふるさとに帰ることができない、いわば「自分を失った人たち」です。失ったからこそ、自分が何者かを確認しようとするし、自分にルーツとなる文化を大切にしようとする。そして、必死に生きています。民族としての誇りを、とても強くもっている人々なのだと思います。

〇保育の実践について

私が勤めている聖和保育園は、定員数が130名ほどですが、その90%近くが在日韓国・朝鮮人の子どもたちです。在日韓国・朝鮮人の子どもたちと日本人が共に育ち合うための「民族保育」を柱の一つとしています。他にも、宗教を通じた保育や、異年齢の子どもたちが育ち合うための縦割り保育などをすすめていて、それぞれの取組を関連づけながら実践を積んでいます。

民族保育というものは、はっきりとした形があるものではありません。本園の園長もどのような保育が民族保育というのか研究していますが、今のところ「悩みながらすすめていくもの」という状態です。なので、私たちの園では、「すべての保育のなかに取り入れるもの」という理解をしています。毎日のあいさつやあそび、食育のなかに編み込むように民族保育を取り入れたいと考えてすすめています。

とりわけ、あそびは大事だと思っています。子どもたちは、あそびのなかで、さまざまな立場、さまざまなタイプの人とかかわり、多くの体験を得ます。例えば、障がいのある子どもたちのようにいっしょにあそんだらいいのか、子どもたちは自分たちで考え、あそびのなかで学びとっていくのです。また、幼少期に自分のありのままの姿を出す体験をすることが重要です。感情や行動に出すことができているかどうかということです。それは、民族保育として大切にしている視点です。

聖和保育園では、「民族保育月間」を設定しています。その月には、保育士が民族楽器や民族衣装を用いたり、さまざまな食文化を取り入れたりするなど、子どもたちが多文化にふれる機会を増やします。

その取組に際しては、職員間で研修をしています。研修では、職員のなかからいろいろな思いをきくことができます。例えば、「韓国の衣装や音楽を、日本人である自分が着たり演奏したりしていいのだろうかという戸惑いもある」という思いから、この



取組を行う根本的な意義について話し合いがすすんだときもあります。「実は自分も在日韓国・朝鮮人なんです」というカミングアウトした先生もいます。これまで受けてきた差別や、通称名を捨てて本名宣言をしたときの思いやなど、時に涙しながら、在日韓国・朝鮮人問題にかかわる思いを出し合いながら、研修をすすめています。このように、職員間で話し合う場をもつことはとても大切だと思います。

私は今ここで在日韓国・朝鮮人であることをこのように語っていますが、自分のルーツを人に伝えることは、やはり勇気がいることです。言いたくないという感じ方をする人も多いです。聖和保育園には職員間に「この人たちならば受けとめてくれる」という信頼感があるので、率直な思いや打ち明けにくい自分のことを語ることができます。「あなたの気持ちをすべて理解することはできないかもしれないけど、あなたのことをもっと知りたい」という職員どうしの関係があるからです。

○今、思うこと ～「多文化共生社会」に向けた取組がすすむなかで

今日の話の冒頭で、「あなたの隣に、在日韓国・朝鮮人はいますか？」と質問しました。この問いは、在日韓国・朝鮮人にまつわる問題について課題意識をもってかかわろうとしていますか？という投げかけです。「多文化共生社会」が社会の大きな課題として認識され、さまざまな取組が生まれていますが、その「多文化」のなかに、在日韓国・朝鮮人のことが含まれているのか、よく考えてほしいと思います。

在日韓国・朝鮮人のなかには、本名を隠して生きている人もいます。日本国籍を取得して日本人として生きる選択をした人もいます。そうした生き方をしなければならない差別が、日本社会にあるのです。先ほど聖和保育園では子どもの90%が韓国・朝鮮にルーツがあると言いましたが、実はその10%も本名を名のれていません。在日韓国・朝鮮人に対する差別が根深さを示しているのだと思います。こうした状況があることは、日本社会として考えるべき問題です。あわせて、「私の問題」という認識も必要です。問題を知って自分がどうかかわっているかを考えることは、在日韓国・朝鮮人だけの話ではなく、すべてのマイノリティの人たちの人権につながることです。

私たち保育士は、子どもたちが将来社会に出て行ったときに、在日韓国・朝鮮人の人権問題、マイノリティの人々の人権問題に対してどんな行動をとることができるおとなになるのかをよく考えて、保育を組み立てていくべきです。「このあそびは、子どもたちのつけさせたい力とつながっているのか」「おとなになって人権問題、差別に出遭ったときのために、今どんな経験、体験をするとよいか」などを考えて、あそびや活動等の計画をつくりあげなければなりません。保育士は、子どもたちの将来につながる「種まき」をしているのだと思います。

外国人が暮らしやすい社会は、日本人も暮らしやすい社会です。外国人と日本人が共に生きる社会をめざすことは、21世紀において人類共同体が向かうべきビジョンとも言えます。在日外国人が日本社会の構成員、地域住民として受けとめられて、日本人と同じく人権を享受できるのが当たり前となるような共生社会の実現をするための取組をすすめていく



必要があります。そのために、「正しい歴史認識をもつこと」「日本に暮らす外国につながる人たちについて課題を知ろうと関心を持ち、正しい状況を把握すること」「あいさつ、言葉、食育、教材、なまえ、あそびなどをとおして多文化共生保育を実現すること」など、みなさんとこれからも考えていきたいと思ひます。

○ト田さんより

聖和保育園では、「多文化共生保育」という言い方をしていません。「多文化共生」とすることで、「広く浅く」になってしまい、在日韓国・朝鮮人のことを置き去りにしてしまうのではないかと考えているからだそうです。確かに、多文化共生保育というと、ニューカマー（新渡日）の子どもにかかわる保育にばかり注目が集まり、在日韓国・朝鮮人に視点をあてた保育については、全国的にほとんどみられていません。それは、在日韓国・朝鮮人は少なくなっているからではありません。それだけ、みえにくくなっている問題だということだと思います。自分の勤める短期大学にも、一定の割合で外国にルーツのある学生がいるはずですが、本名を名のっている学生は2名だけです。

マジョリティ（多数派）は人権問題について、「マイノリティ（少数派）もある程度はこちら（多数派）にあわせなければならない」と考えがちですが、マイノリティ（少数派）の方に話を聞くと『多数派に合わせなければならない』と考えることなんて、ほとんどない」と言ひます。ここに、認識のズレが生じているのです。こうした状況があることを、多数派（マジョリティ）は気づかずみすごしているのです。気づいていないから、在日韓国・朝鮮人を傷つけることが生じるのです。保育においても、その存在をみすごしていないか、今一度立ち返ることが大切だと思います。



2. 「多文化共生保育」とは ～金 恵心さんのお話を受けて～

○まず「多文化共生」という言葉の捉え方を整理しましょう

「多文化共生」という言葉を、「国籍や民族のちがいを認めること」と狭義に捉えると、多文化共生保育は「在日外国人の子どもを中核にしてすすめる保育」という理解になります。

しかし本日は、国籍や民族だけでなく、「性別・年代・性的指向・宗教・障害の有無などのちがいによる“文化”の差異を認め合うこと」を「多文化共生」と広義に捉えたいと思ひます。すなわち、「多文化共生保育」とは、「一人ひとりがつさまざまなちがいを認め合い、共に生きることができ力を育む保育」である、と理解しましょう。

そうした理解をしたうえで、本日の研修では、国籍や民族の違いに焦点をあてます。ここで研修する保育の考え方は、人々がつさまざまなちがいを視野に入れた保育にも通じるものであることをしっかりと認識しましょう。



○「在日外国人の子ども」にも多様性があることをふまえましょう

「在日外国人の子ども」といっても、民族や国籍、来日の経緯、在日期间によってその状況はさまざまです。例えば、大きく、「ニューカマー（new comer）」と「オールドカマー（old comer）」という2つのグループがあるという考え方がありますが、それぞれが抱える課題は大きく異なります。

ニューカマー：主に1980年代以降に渡日した外国人を指し、民族や国籍も多様。文化・言語・宗教などの点において、「可視的なちがい（外見的なちがい）」がある場合が多い。

オールドカマー：歴史的な背景をもって日本に在住している旧植民地出身者（在日韓国・朝鮮人や台湾人）及びその子孫のことを指し、現在、在日3世・4世・5世の時代を迎えている。「可視的なちがい（外見的なちがい）」がない場合が多い。

（当日の配付資料より）

また、日本国内における「民族や文化のちがい」は、在日外国人に限ったものではなく、アイヌ民族や沖縄の人々といった、独自の歴史と文化をもった人々の存在があることも念頭に置く必要があります。

○「多文化共生」がめざすものは何かをよく考えましょう

多文化共生は、一人ひとりもっている「ちがい」を理解し、尊重し合うことです。よって、多文化共生をめぐる問題は、「ちがい」の尊重ができていないときに生じます。

しかし、現代社会においては、文化的多様化がすすむなかで、「ちがい」をめぐるさまざまな反応があらわれています。

【外国につながる人が異なる文化（日本文化）と接触することであらわれる反応】

- ・**統合**…自分の文化を保持しつつ、異なる文化（日本文化）との接触も行う。
- ・**同化**…自分の文化を放棄し、異なる文化（日本の文化）と接触する。
- ・**分離**…自分の文化のみを保持し、異なる文化（日本の文化）との接触を避ける。
- ・**境界化**…自分の文化と異なる文化（日本の文化）とも距離を置く。

「同化」「分離」「境界化」という反応には課題があります。

「同化」がすすむと、アイデンティティが混乱し、家族との会話がなくなることが生じることがあります。「分離」がすすめば、外国人の子どもの日本社会における自己実現が難しくなります。「境界化」がすすめば、外国人の子どもの安心できる居場所を喪失するおそれがあります。

多文化共生がめざすところは「統合」であるべきです。保育においても、異なる文化を受容しながら、文化的アイデンティティを維持する態度を子どもたちに育むようにしたいところです。

○「多文化共生保育」をすすめるにあたって、園・所の状況を捉えましょう

自分の園・所の「多文化」化がどのような状況であるのか考えてみてください。外国にルーツのある子どもたちの状況によって、保育の実践が異なります。

在日外国人の子どもたちの状況を捉える視点

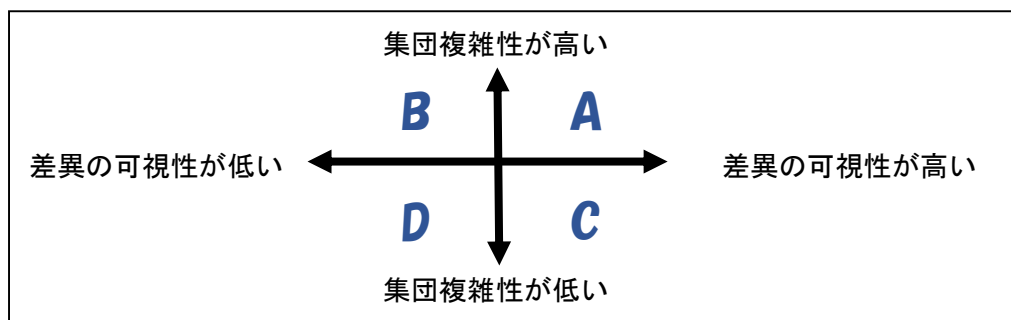
(1) 「差異の可視性」の状況

⇒言語・食べ物・生活習慣・衣装・肌の色・顔つきなどのちがいなどがみえやすい子どもたちがどれくらいいるのか？

(2) 「集団複雑性」の状況

⇒園・所のクラスにおいて、在日外国人の比率はどの程度か？

⇒国籍・民族の多様性はどれほどあるか？



自分たちの園・所の状況は、A~Dのどこに位置づきますか？

自分の園・所が「分離に向かいやすい集団」であるのか、「同化に向かいやすい集団」であるのかを意識し、その視点から子どもの課題を捉えることが必要です。

また、子どもたちの課題には「現在」と「将来」という2つの時間軸があることも理解しなければなりません。子どもたちの将来につながる力を育むことを念頭に入れましょう。



子どもの状況から生じる保育・教育の課題

「差異の可視性」「集団複雑性」が高い状況だと、ちがいがみえやすいため…

- ・言語等において、園・所生活に困難が生じる。
- ・「分離」に向かう集団にすすむことが考えられる。



「分離」をとめるための実践をすすめる必要がある
(園・所生活への適応を促す取組等)

「差異の可視性」「集団複雑性」が低い状況だと、ちがいがみえにくいいため…

- ・在日外国人の子どもアイデンティティを巡って将来的に課題が生じる。
- ・「同化」に向かう集団にすすむことが考えられる。



「同化」をとめるための実践をすすめる必要がある
(民族文化のちがいに触れる取組等)

3. 各現場で抱えている課題を共有しよう。

金恵心さん、ト田さんのお話を受けて、「在日外国人問題にかかわる保育・教育の現状や課題」をグループで交流しました。その一部をご紹介します。

子どもの姿から

- ・あそびのルールが伝わらず、トラブルになる。
- ・言語コミュニケーション力が低いために、思いを伝えられず内心が伝えられない。
- ・周りの子どもと同じ行動するので、言葉をわかっているように見えるが、実は理解できていない。
- ・気になる姿の背景が、その子の今の家庭環境にあるのか、母国の文化にあるのか、みきわめが難しい。
- ・家族と話すときは母語で話すが、保育所では日本語で話すために、日本語の習得が中途半端になっている。
- ・本名だった子が、小学校入学時に通称名にすることにした。

保護者との関わりの中で

- ・言葉が通じず、保護者とのコミュニケーションに困難さがある。
- ・言葉の捉え違いで誤解をまねくときがあるなどして、信頼関係がつくりにくい。
- ・職員や保護者とコミュニケーションをとる際に不安そうにしている。不安な思いが解消されず、困っている様子もみられる。
- ・親どうしが子育ての不安や悩みを共有しながら、子育てのなかにある差別に気づけるような場が必要。
- ・保護者どうしのつながりをどうつくるか。
- ・園では日本語でコミュニケーションをとっている外国人の保護者の方がいて、日本語を話すので安心してはいたが、実はおたよりや連絡プリントの内容は伝わっていなかった。

自分自身の問題として

- ・文化の違いに対して、知ろうとはするものの、具体的な困り感をきいたり、対策を考えたりすることができていない。
- ・日本にあわせてもらって穏便にすまそうとしている。
- ・子どもが日本に同化してきていて、親も日本人と同じようにしようとしているなかで、自分も日本人と同じように「させてあげたい」という意識をもっていた。
- ・かかわっている子どもの母国の文化をわかろうとしていなかったかもしれない。言葉の壁をどうクリアしようかということばかりに注意がいていた。
- ・意図的に異なる文化に触れさせる仕掛けができていない。
- ・実名を隠して生活している人が私のまわりにいるのかもしれないということをまず認識しなければならない。



4. お互いの取組について『交流』しよう。

お互いの課題を出し合うなかで、「あれ、その課題を乗り越えるために、自分の園・所ではこんな取組をしているぞ」と気づくこともありました。毎日の保育・教育に一生懸命取り組むなかで、気づいていなかったけれど実は多文化共生に向けて効果的な取組を知らず知らずしていた、ということがあり得ます。自分たちの取組を多文化共生という視点で意識化して、どんな取組を各園・所で行っているのか交流しました。



親どうしが集まり、子育ての不安や悩みを話して共有できる機会を園でつくっています。その話をしながら、今まで気づいていなかった、子育てのなかにある差別に気づく保護者もみえます。

行事や活動の連絡をするときに、ただ日程や内容を伝えるだけでなく、「この行事・活動をなぜ行うのか(日本の風習)、どのような目的があるのか」ということを外国人保護者に伝えるようにしています。

『せかいのひとびと』という絵本の読みきかせをしました。読んだときに、子どもたちはいろんな反応をみせます。「様々な国の様子を伝えた」というところで満足せず、子どもが示した反応に、保育士としてこの次にどう返していくのかを考える必要があると思いました。

「みんな同じに」という言葉で、外国につながりのある子どもを日本人の子どもと同じようにさせようとしている自分があるかもしれないので、園内の研修会で、職員どうしでお互いの気になる対応について、話し合っ振り返ろうとしています。

コーディネーターさんや通訳の方に協力していただき、外国の踊りやあそびを紹介してもらっています。そのあそびを、文化祭などの園内行事につなげるようにしています。



5. 多文化共生保育のこれからの取組を「発信」しよう。 ～未来への種まきワーク～

一人ひとりが「次の一歩」としてやってみようと思うことを考え、人権保育推進のための『種』をまきました（「発信」）。具体的には一人ずつが付箋に自分のできることを書きました。その小さな『種』（できることを書いた付箋）を、『畑』（模造紙）に貼って（種まき）いきました。



～一人ひとりがまいた「種」～

【明日からすぐ取組もう！】

- ・民族文化を保育の中にとり入れ、いろんな文化との出会いや、その文化について学ぶ。
- ・子どもの母国のことばであいさつする。
- ・さまざまな国の文化を知って、職員や子ども、保護者に発信していく。
- ・子どももおとなもありのままを出せる関係、居場所になっているか自分の園をふりかえる。
- ・保護者に、その国の文化を教えてもらい、他の保護者に伝え、つながりをつくっていきたい。

【自分の生き方・保育士としての姿勢を振り返ろう！】

- ・外国人だから、日本人だからではなく、「その子」一人ひとりをしっかりみつめて保育をしていきたいと
思います。じっくり話を聞き、悩みや気持ちに寄り添いたいです。
- ・保護者、地域の人、小学校や中学校の先生、身近な人ともっと話をしていきたい。そして思いを感じ
とれる自分になっていきたい。
- ・保護者、子どもが安心できることで、困ったことなどが発信できる関係をつくれるようにしていきた
い。また、キャッチできる人権感覚をみがきたい。
- ・「あなたのことをわかりたい」という気持ちをもって、かまえず積極的にかかわってみよう!!
- ・見たこと、感じたこと、思ったことを言えない子ども、言わせない社会をつくらないために…相手の話
を聴ける、自分のことを言える自分に…。
- ・相手の立場になって考えられるように意識する。（日本ではあたり前だが、外国ではどうか…など）

【「多文化共生」の理解を深めて取組につなげよう！】

- ・今回の講座の話をもまず職員に伝える。可視性が低いちがいのある子（在日韓国・朝鮮人の子）がい
るはず。
- ・オールドカマーの友だちに会って、思いやルーツを聞く。私の思いやルーツも知ってもらおう。
- ・在日韓国・朝鮮人の子どもが自己肯定感をもち、自信をもって生きていくことができるように心の種
まきをしつづけていきたい。
- ・ニューカマーの子どもたちばかりに気がいっていたことに気づかされた。オールドカマーの子どもた
ちに、もっと広い視野でむきあっていく。
- ・いろいろな国があり、文化があり、言葉がある。まずは知ることから始めていこう!!そして保育につな
げる!!